

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっこい生きてます!

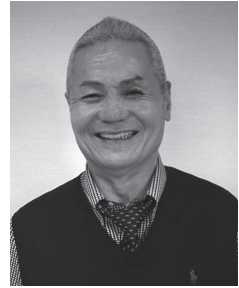


既報通り10月8日に潮騒リカバリー・パレードを行いました。第2回の今回は鹿島神宮参拝を加え、潮騒オリジナルのリカバレを実現しました。単独イベントとしてやり切ったことでスタッフには自信となり、参加者にも好評でした。その様子は10日付け毎日新聞茨城版に記事掲載されました。そのため今号は潮騒リカバレの大特集です。みなさまのご支援・ご協力に感謝します。(4~6ページに記事)

2018

10

潮騒リカパレで 困難に立ち向かう 確信深める



事前告知の通り、潮騒JTCは10月8日の体育の日に第2回「潮騒リカバリー・パレード『回復の祭典』in 鹿嶋」に取り組みました。パレードをやり終えたあと、私のなかには清々し達成感が生まれ、アディクトとして残された人生を胸張って生きようという自信を深めました。また潮騒独自のカタチを追求でき、改めて潮騒の持つマンパワーを実感させられました。諸準備と当日の交通対策を支えた農業隊を主力とするスタッフには感謝です。地元の鹿嶋警察署のご協力にも頭が下がりました。台風の影響による前日の猛暑とは打って変わり、当日は外歩きには丁度いい曇天で、私は前年に続き先頭で潮騒旗を振りながらパレードを率いました。約5キロに及ぶ全行程を仲間と一緒に歩き通せるか、多少の不安はありましたが、鹿島神宮の樹林を抜け国道124号のパレード出発地点では「さあ、みんなで弾けよう!」とスタートのかけ声を発し、歩を進めるに従い気分が高揚していきました。時折後ろを振り返ると100人を超える隊列の長さ感動を覚え、仲間達の生き生きとした表情に回復の魂が揺さぶられる思いでした。

実は今回の潮騒リカパレには私のなかに揺れる思いがありました。リカパレ東京実行委員長の城間勇さんが潮騒人間塾で話してくれたように(前号掲載)、リカパレは従来の守りの姿勢から一歩踏み出し、私達の内なる無意識を呼び覚ます「権利擁護」のアクティブな活動です。ただ、私には人生の大半を裏街道で生きてきたという負い目から、世間に「我々を重んぜよ!」と声高に叫ぶことには抵抗があり、むしろ「今日一日の回復」の活動に忠実でありたい、という思いが強くあります。その一方で、依存症治療の歴史が浅い日本では依然として社会の偏見と無理解が根強く、潮騒でも新たな関連施設をつくるたびに地元から強固な反対を受けているので、これを乗り越えるにはどうしたらいいのかと悩み続けて来ました。その焦慮からリカパレ運動に共鳴して、初回から東京開催に馳せ参じてきました。その後、リカパレが地方へも波及してきた流れを受け、私の中にも「潮騒なら単独開催が可能では?」とのチャレンジ精神が湧き上がりました。そこで考えたのが鹿島神宮への回復祈願と、深い神宮の杜を散策するというオリジナルな企画です。結果、参加者にはとても好評だったので、反省を加えながら次年も潮騒版リカパレに挑戦していこうと思います。

潮騒が毎年取り組む公開フォーラムもそうですが、施設が大規模化するに従いイベント事などで全体を統括するのは至難の業です。依存症のリハビリ活動を基本に据えながらも就労支援で独自の道を歩む潮騒は、施設運営のあり方の基本に自助グループで培われてきた自主・自立の精神、当事者活動や非組織化の原理、アノニマスの平等原則など、日本の社会が“非常識”としてきた考え方を柱にしています。その一方で社会との中間施設という衣をまとうため、理想と現実のはざまで常に揺れながら前に進まなければなりません。私は今回の潮騒リカパレで、仲間との霊的な繋がりがあればどんな困難にも立ち向かって行ける、との確信をさらに深めることができました。

(センター長 栗原 豊)



初の安全運転講習会

～新しい生き方に運転マナーへの配慮を促す～

9月19日午後、鹿嶋市まちづくり市民センター講義室において、潮騒ジョブトレーニングセンター(潮騒JTC)として初めての安全運転講習会が行われました。施設での業務として自動車の運転を担っているスタッフや職員らが多数参加して講師の話に耳を傾けました。加えて、同乗者としても安全運転マナーを学ぶ必要があることから、入寮者全員を対象とした講習会となりました。

潮騒JTCでは、医療機関やミーティング会場などに仲間を送迎する際、業務用車両が使用されています。今後、事業の拡大に伴い、業務用車両の使用頻度が高くなることも予想されており、適切な車両管理と運転を担うメンバーの技術の向上や、同乗者も含めた安全運転マナーの向上が懸案となっていました。そうした趣旨から、今回、損害保険会社の担当者を講師として招いて、交通事故防止に向けた安全運転講習会を行うことになりました。

この日の講話では、担当者がスライドを使いながら自動車事故の現状とその原因を解説し、それを踏まえて、

事故防止に向けた取り組み方を学ぶことができました。また、交通事故の基礎知識として、事故が起きてしまった場合の責任や人身事故の取り扱い、そして過失割合の考え方の説明がなされました。その上で、路上にはどのような危険が潜んでいるか、どのような運転をすれば事故を回避できるかを映像と資料を用いて解説してくれました。

参加したメンバーは「路上には危険箇所が多いことを思い知り、とても勉強になった。漫然と運転してはダメで、今後は、ハンドルを握ることは仲間の命を預かることなのだ、と肝に銘じます」などと決意を新たにしていました。今回の講習会は、日々の依存症回復プログラムへの一環として位置づけられ、アディクト(依存症者)として新たな生き方を模索する機会となりました。

栗原センター長は「取り組めてよかった。私達は過去の生き方を反省して新しい生き方を探し続けなければならない。自分を見つめ直す努力は運転マナーにも広げる必要がある。心に余裕を持った運転を常に心掛けたい」として、今後も定期的に取り組む意向を示していました。



潮騒リカバレin鹿嶋

100人の仲間が胸を張り5キロをパレード ～ 鹿嶋神宮参拝でオリジナルな潮騒リカバレ実現 ～

日本列島各地に大きなつめ跡を残した大型で非常に強い台風24号とほぼ同じコースをたどるとみられた台風25号の襲来で、開催も危ぶまれた潮騒ジョブトレーニングセンター(JTC)主催の第2回「潮騒リカバリーパレード『回復の祭典』in 鹿嶋」が10月8日、鹿嶋市内の国道124号沿いの沿道で行われ、参加した潮騒の仲間や家族、支援者など約100人が栗原センター長の振り掲げる潮騒旗と横断幕を先頭にパレードして歩き、初秋の街頭で回復する姿と喜びをアピールしました。

L・ホワイト氏の来日きっかけに実行委員が発足

リカバリー・パレード(リカバレ)は、薬物やアルコール、ギャンブルなどの依存症、心の病などを抱える人達が、家族や友人、関係者などと一緒に回復の喜びを分かち合い、祝う自主イベントです。薬物依存症の治療に30年近く携わり、2007年に来日したアメリカの依存症回復擁護運動の理論的支柱であり「社会の偏見を取り除くのは、回復者自身の責任である」という言葉を提唱したウィリアム・L・ホワイト氏(Faces and Voices of Recovery, USAのボランティアスタッフ)の講演をきっかけに実行委員会が結成され、3年後の2010年9月23日に東京・新宿で第1回リカバレが開催されました。社会

の偏見や無知を取り除き、「以前よりもよくなっていく自分」と向き合いながら自信を取り戻すとともに、「依存症は回復が可能だ」ということを訴えて街をパレードする姿は全国に広がっています。(今年は9カ所で開催予定)。

潮騒JTCは昨年、潮騒12周年フォーラムとドッキングする形で第1回リカバレを開催し、成功裏に終わりました。今年は昨年の反省を踏まえながら潮騒ならではのパレードにすべくプロジェクト会議で協議が重ねられ、鹿嶋市の地の利を生かした鹿嶋神宮を参拝する「潮騒版リカバレ」が企画されました。

幟旗や手作りプラカードを持って街頭パレード

当日は、早朝から鹿嶋神宮を参拝する仲間たち約40人が潮騒アディクションヴィレッジ(デイケア)会館前に集合。グループごとに列を組んで並び、神宮参道に向かいました。大鳥居の前では、それぞれが一礼してから鳥居をくぐり、心を鎮めながら楼門前まで参道を厳かに進みました。拝殿前に整列後、グループごとに「二礼二拍手一礼」の参拝作法に従って参拝。日本建国・武道の神「武甕槌大神(たけみかづちのおおかみ)」に回復を祈願し、一行は深い樹林の奥参道を歩きました。

パレードのスタート地点となった国道124号線のセブ

ンイレブン駐車場では、送迎バスで集合した仲間たちと合流。参加者たちは幟旗や手作りのプラカードなどを持って隊列を組み、エイサーの曲とエイサー隊が叩く太鼓に合わせながら練り歩きました。街宣車からはリカパレの趣旨や意義を訴え、市民に依存症から回復している姿をアピールしました。全員が最終地点の潮騒食堂「おらげのかまど」裏手の駐車場に到着し、街頭パレードは無事終了しました。デイケアセンターを出発してから約1時間半、約5キロの行程を歩きました。

東京組も「潮騒カラーの出たパレード」と評価

リカパレ実行委員会を代表して百寿代表のマコトさんが「今年は単独で取り組んだ初めての『潮騒版リカパレ』になりました。課題もありましたが、来年はもっと肉付けされていくのではないかと思います。皆さんご苦労様でした」と参加者やスタッフたちの労をねぎらいました。

一緒に歩いてパレードを盛り上げた東京リカパレ参加者の晴美さんは「潮騒カラーの出たパレードだと思いました。ぜひ来年も参加させてください」と述べると、大きな拍手が送られました。

栗原センター長は「歩きながら自分たちの姿をアピールすることで全員が喜びを感じていたのではないかな。今日一日のプログラムを積み重ねながら回復していく肯定感を取り戻し、確認することが出来たのではないかなと思う」と感想を述べていました。(岩)

入院はしないで精神科に併設されているデイケアへの通所を始めました。

デイケアでのプログラムにたまたま「就労プログラム」があり、自分達依存症者を含めて精神に問題を抱える人達が社会に参加をする方法の一つとして「障害者として企業の障害者枠で働く」という制度を半年ぐらい掛けて教わりました。この制度を知って「これは施設でのプログラムの延長線にある生き方なのではないか」と思えて希望を持てたのです。これまでは施設や自助グループの中で自分の病気と正直に向き合う生活だったのですが、これからは自分の病気を社会に対しても認めて、社会の制度を活用して生きて行くことが、自分の生活を一步前に進めて行ける一つの方法なのではないか、と考えるようになったのです。

今は障害者の認定を受けて、精神障害者として生きています。薬物依存症は特別な病気ではなく、他の精神病者と同じ精神障害者の一人なのだとは自分では考えるようになりました。

それだけに社会に自分達の姿を出して、「私たちは病気だけれど回復できます」と潮騒リカパレで訴えられたことは、自分にとっていい経験になりました。就労プログラムや社会制度(障害者枠で働く)を活かしながら、障害者として社会の中の小さな一部として生きる喜びに出会えたとき、また皆さんと共に喜びを分かち合いたい。俺の夢一つ！薬物のない人生！キープカムバック！（横浜在住、クニオ）

クニオ
感想文

社会でも自分の病気を認めて 生きる希望に

4年前に潮騒を“卒業”して久し振りに寄らせてもらいました。今回、潮騒リカパレに参加して旧知の仲間たちと再会でき、とても楽しかったです。潮騒を卒業してから横浜に戻って2年ぐらい自助グループ中心の生活を送り、社会復帰する機会を探っていました。その際、主治医に社会復帰についてすべき助言を求めたら、返事は「コンビニの求人情報誌や駅にある求人フリーペーパーの活用など」でした。

その時自分は「希望」よりも「肩が重くなった」事を覚えています。せっかく施設の中で自分の病気を正直に受け入れて過ごせるようになったのに、そのように社会へ参加をしていったら自分の中のバランスが再び崩れてしまうのではないかと正直不安になりました。ちょうどその頃に、本当に体調を崩してしまいました。この時は入院をお願いしたのですが、主治医の提案に従い

クマ
感想文

昨年とは違い今年は成長と感動を 経験した自分がいた

潮騒リカパレには昨年の初回に続き2度目の参加となりましたが、前回とはひと味違った感覚がありました。みんなで鹿島神宮を参拝した後、境内の参道と広大な森の中をしばらく歩きました。これまで2度初詣に鹿島神宮を訪れていますが、「こんな素敵な森があったんだ！」と驚くばかりでした。当日は曇りがちの天気でしたが、微風が吹いて樹林の中が気持ち良かったです。境内の造りや、自然に馴染んでいる神宮に強い興味と親近感を持ちました。これこそ潮騒リカパレに参加したからこそその感動でした。

鹿島神宮を出てからはエイサーの曲が流れるなか、国道124号の歩道を歩き続けましたが、途中ウグイス嬢を務めたルミさんが宣伝車のなかから、依存症者でも努力している者たちがいること、またその理解を求める言葉は、私にとって勇気の持てる心強いものでした。

こういう仲間達と一緒に歩いている自分が「依存症という病気でも恥ずかしさを持つ必要はないんだ…」という気がしてきたのが不思議でした。

一般の人達が、依存症という病気をどれくらい理解してくれているか、アディクトに対してどのような見方をするのか、は人それぞれ違うだろうと思います。でも当事者の私達が前向きな気持ちを持って、一つひとつ頑張っていれば、温かく受け止め、受け入れてくれる人もいる、いずれは何の支障もなく生きていくことができる世の中になるだろう…と希望を抱く自分がいました。

なので今年の潮騒リカパレは、ただ仲間と歩いていた昨年とは違う感情をたくさん抱いている私がありました。様々なことを感じ、考える私に変化していて、少しばかり心が成長しているのかな、と思ってしまいました。東京から駆け付けて一緒にパレードをしてくれた仲間の存在も心強かったです。こんな体験ができるのも、この施設にいて、なおかつ、エイサーの一員になっている私がいるからなのだ、と思います。意義ある一日となりました。(くま)



今は堂々と笑顔で回復の人生を歩いている

2度目となった今年の潮騒リカパレには、新たに鹿島神宮参拝(回復祈願)がコースに入りました。午前9時すぎにデイクアを出発し、列をなして鹿島神宮へ。大鳥居と楼門をくぐり境内の拝殿での参拝では、息子の幸せと自分の回復を祈りました。

「依存症は病気」。この言葉は私にとって、なかなか受け入れられないものでした。ましてやそれを街の人に知らせるなんて… 3年前の私には恥ずかしさと惨めさからできないことでした。でも今は堂々と、そして笑顔で歩くことができます。依存症で苦しんでいる仲間は数多くいるけれど、回復という新しい人生を歩めている仲間は少ないという現実。私は幸福なんだ、と改めて実感しました。私は頭も心もおかしいけれど、「るみの家」につながり、仲間に出会い、このプログラムによって変えられる自由が与えられたことに感謝しています。

そして今回ウグイス嬢に施設長のルミさんが立ち上がり、高らかな声で宣伝車から街の人に呼び掛けました。毎日聞いている声なのに、なぜか新鮮で、心地良く響きました。総勢100名を超えるパレードは壮観で、長い隊列をつくり、みんな笑顔でゴール地点(潮騒食堂「おらげのかまど」駐車場)に着きました。足は痛かったけれど、参加できたことに感謝しています。依存症に

なって良かったとはまだ言えない私ですが、この潮騒に、るみの家に繋がって本当に良かったと思います。素敵な一日をありがとうございました。(メイ)



以下は東京から参加してくれた仲間の一人、加藤孝さんの感想です。

狼煙が上がる ～回復の祭典 in 鹿嶋に参加して～

今日一日、感謝、仲間。回復のプログラムのミーティングでの僕の三大嫌いテーマ。アルコール依存症と診断されて19年。その間入院は4回、最終飲酒は2017年1月6日。リカパレのことは東京で始まった時から知っていた。身近な仲間が関わっていたから。趣旨も悪くないと思っていた。当然必要なことだと考えた。だけど遠巻きに見ていた。「俺みたいな×加害者は参加しちゃいけない。被害者を再び傷つけてしまう」。それから劣等感があつた。

「順調な回復者の皆さん、そしてそうではない僕」。ところがなぜか主治医からOKが出た。そして歩いてみた。声を挙げて。2018年9月16日。横浜。56歳の誕生日。反原発、hiv aids 啓発、生活保護、メーデー、lgbt。今まで参加したデモ、パレード。そのどれよりも当事者性を感じた。「これが自分のデモだ」。そう感じた。

東京は主催者側でアップアップ。そうして鹿嶋に来た。いつもは集団が苦手な僕がなぜだか「仲間」を感じた。本当に。理由はわからない。厳(いか)つく見える男性。苦手なタイプ。でもそういうお前は?何様?何者?違い探しが少しは終わったのかもしれない。いつでも不安がある。またうまくいかないんじゃないか。

でもこの日、こうも感じた。たとえそうだとしても。幟(のぼり)をかかげ狼煙(のろし)が上がるここがある。やり直せるんじゃないか。鹿嶋に来てよかった。

(加藤孝・東京)



第6回

潮騒

人間塾

渋谷ダルク代表
トムさん「僕の回復は仲間たちと
ハイヤーパワーに導かれている」

第6回「潮騒人間塾」が9月8日、鹿嶋市まちづくり市民センターで開かれ、渋谷ダルク代表の坪倉洋一(アノニマス名・トム)さんと同施設長のツトムさんが、入寮者に希望をもたらし回復のメッセージを届けてくれました。トムさんは栗原センター長が7回目の逮捕時に文通を通して知り合い、その後センター長がダルクで回復の歩みを始めるとスポンサーとなり、NPO法人・潮騒JTCの理事も務めてくれています。センター長にとっては人生の指南役ともいべき大きな存在で、この日は12ステップの神髄とも言える「自分を超越する大きな力(＝ハイヤーパワー)に身を委ねる」回復人生について自らの体験談を通して分かりやすく話してくれました。

トムさんは1948年、神奈川県横浜市生まれ。進駐軍米兵だったアメリカ人の父と日本人の母の下に生まれ、長身で甘いマスクから売れっ子モデルとして雑誌などで活躍するものの、若くして薬物やアルコール依存症に苦しみ精神科病院への入退院や刑務所経験を経て、50歳近くになって東京ダルクにつながりました。その後は沖縄ダルク入寮を経て日本ダルク本部職員となり、2009年には横浜ダルク・ケアセンター施設長に就任。各地の刑務所などで「薬物再犯防止プログラム」に参加する一方、新宿区役所アルコール問題「とり木」相談員として貢献し、横浜ダルク退任後は渋谷ダルク理事、現在は同代表を務めています。

この日の講話で、トムさんは「自分が本当に依存症という病気なのかはよく分からない」「正直であることを避けようとする自分の本質は変わっていないのではないか」などと本音で切り出し、今も迷いの日々ながら仲間たちの輪にいることや、ハイヤーパワーの計画に身を委ねる生き方によって、「今日一日、自分が生かされている」と力説しました。トムさんは20年以上クリーンを積み重ねていますが、「僕の周りにはハイヤーパワーが送り込んでくれた、自分以上に僕のことを真剣に考えてくれる仲間たちがいる」として、自我を超えた不思議な回復の人生の持つ意味を体験を通して入寮者に率直に語り掛けました。

とはいえ、トムさんにも過酷な試練に翻弄(ほんろう)された過去があります。10代の頃からの睡眠薬遊びに始まり、やがてアルコールと覚醒剤に溺れて何もかも失い、運命に導かれてダルクに繋がりますが、当初は必ずしも順調な道のりではありませんでした。入寮した沖縄ダルクでの幻覚幻聴体験など、今ではエピソードとして語れる困難を経て、「やがてクスリを使いたいという気持ちより、もう使いたくないという気持ちの方が大きくなった」と回復のルールに乗りました。最後には、近藤恒夫さん(日本ダルク代表)と共にダルクをつくった故ロイ神父の「仲間になってくれてありがとう」の言葉で講話を締め括りました。

トムさんに先立ってメッセージに立ったツトムさんは、かつての横浜ダルク時代の体験を披歴しながら、ミーティングと仲間の助言により12ステップを使って生き方を変えられたとし、「私にとって仲間は回復の道具」「仲間の輪のなかに居続けることは気持ちがいい」などと話してくれました。(潮)

がーちゃんの 極私的懺悔録

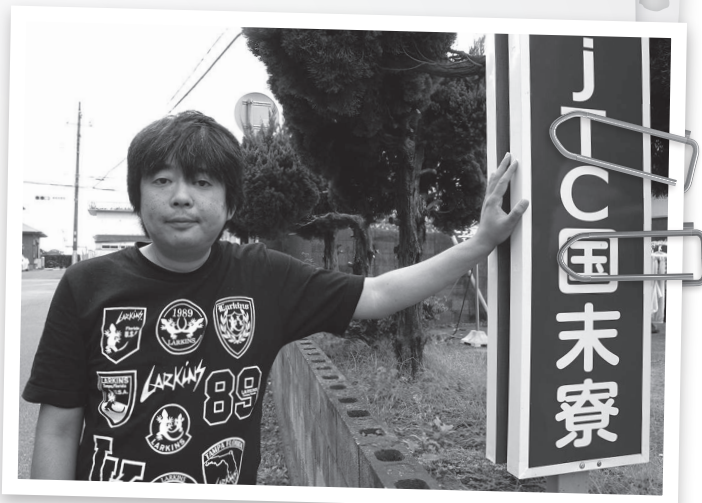
「他人事だと思って…」

その
8

アルコールによる幻覚の中で
おかしいゴミ問題に悩む

【PRめいた著者プロフィール】

- ◆ アノニマスネーム「ガーゴイル」(36歳/男性)
- ◆ 出身：北関東の田舎町
- ◆ 前職：元詐欺師(自称)のような仕事&元介護福祉士
- ◆ 病歴：鬱病・発達障害・自閉症・
各種依存症(薬物・アルコール・女性・対人関係 ets)



中卒のヤンキー後輩に ビビって逃亡したトラウマが

(前回からの続き)「虎は死して皮を残し、人は死して名を残す」。私も人間として生まれたからには何事かを成し遂げてから死にたいと思う。しかし今の私は、役所で木で鼻を括る対応に怒り、病院行きを諦め、朝から酒を飲んで通勤していく人々を横目に「へっ、ごくろうなこった」と呟き、放屁。午前中の早いうちに酒が回って、正午には瞼が下がり、そのまま就寝。夕方起床し、適当な居酒屋でウイスキーを五合ほど飲み干して帰宅。調子のよい日は、そのまま藤圭子の「夢は夜開く」を熱唱しつつ、またサントリーブラックニッカを二合のみ、ぶっ倒れるようにしてまたも就寝…。

そんな日々を送ってきた私は、とてもじゃないがナポレオンや山本五十六、チンギスハーンなどの武勇伝で名を残せるはずもない。もし今の健康状態で戦争にいったら、運動不足で10メートルも突撃しないうちに横っ腹がいたくなり、その場で昏倒。「うーん」「うーん」と唸っているところを攻撃され被弾。即死。だから英雄など夢のまた夢。これではただの非国民である。

では、悪名はまわりつくが強力な指導者たち、スターリン、毛沢東、ヒトラーのような人物になれるかと言えば、答えはナイン!。そう言えば専門学校時代にデイサービス施設でバイトしていた時に、中卒のヤンキー後輩にビビってしまい、教育を頼まれた翌日にバックレた思い出が私のトラウマになっている。コレでは政治的指導者などドリームのまたドリーム。なので、私にできることは酒を飲むこと、キャバクラに行く

こと、糞を垂れること。この三つしかない。どひゃあ、とんでもない穀潰し、売国奴、息をする公衆便所。これじゃ生きてる意味がないジャン。私は軽く絶望したが、さらに絶望したのは昔からこの生活習慣が変わっていないことである。

「少年よ、大志を抱け」とばかりに よしやろう

もともと人が生まれ持つてくる「勤勉さ」など、お袋の腹に置いてきてしまっただけで33年。うち20年近くは酒でやり過ごしている。これではさすがに体を壊すよ、お前さん。といっても病院に行こうとしたところ、仕事なんてしてねーものだから、前回記したように保険証がもらえず医者にもかかれねえ。まったくまいっちゃったね。胃の痛みが収まらないので、キャベジンをつまみに酒を飲んでいる。これでは名前とか皮とかを残す前に爪の垢すら残せない人間になりそうだ。

なんて将来を悲観しても始まらず、未来に向けてやるべきことはいくつもあるので、それを解決しないで酒ばかり飲んでいてはいけない。誰も見ていないところで浄瑠璃の稽古や、ボンジョビのものまねをしている場合ではないのである。世界一のカレー大好き人間、クラーク博士は言った。「ぼーいずびーあんびしゃす」と。そう「少年よ、大志を抱け」だ。よしやろう。やってやろうじゃないの、だってカレー好きだし…。

私は大志を抱くことにした。ただ、少々問題なのは私自身やりたいことがあまりなく、例えばプレステやりたい、キャバクラ行きたい、特殊浴場で気色よくなりたい、くらいで満足してしまうので、一流企業に就職したい、

起業したい、などのビックなドリームが目の前に出てきても、「そういうのはちょっと面倒くさいな」と自ら逃亡。少し努力すれば何とかなるオアシスを自分から放り投げ、蜃気楼に惑う人生なのだ。

でも、これから違う。気を取り直し、大志を抱いてクンクンの頭脳になった私は何をすべきかを考えた。お掃除かなと思った。しかし私は生まれてこのかたお掃除なんてやったことがない。年中部屋はごみだらけ。焼き鳥のタレ、唐揚げ君、ペッツ、おいしんぼ、吸殻、アルサロの名刺、猫のゲロ、よく分からない毛玉、陰毛、山崎パンのシール、やや過激な主張をしている人形、大福餅などが足の踏み場もなく散乱していて、どこから手を着けていいか分からない。こんなうちに誰がした…。まあ、僕なんですけどね。親父が死んでから一回も掃除してナッシングなのですよ。

「ブリッツファイエル」作戦も アルコールがないと…

しかし、これでは行政の手が入る前に何とかせんとまずい。ただ無計画に掃除しては埒が明かない。私はウイスキーをグビりと一口飲み作戦を練った。作戦はひとつしか浮かばなかった。作戦名「ブリッツファイエル」。この作戦では烈火の勢いと化した私が掃除道具を振り回し、有象無象を逃すことなく、容赦なくごみとしてこの世から捨て去る作戦である。えっ、分かりにくい？ じゃあ簡単に言うと、目に映る物はすべてごみだと思い全てのものを捨てる、という作戦なんすよー。これなら、はんばねえ。

じゃあスタートと思ったが、「ちょっとまてよ」。頭のなかに色々やばそうな感じがよぎった。貴重品とかどうすんの？ 私は目の前が真っ暗となった。確かに今月だけでも財布、高級ライター、Wi-Fi 発生装置など結構いろんなものを部屋でなくしている。それらがゴミとして出てきてしまったらどうするのか？ 私は捨てられるのか、それらを…。まあ無理なんで、そこはケースバイケース。臨機応変で対応しよ〜っと。

あとやっぱりBGMは必要だと思うの、私。なので作業にグローブができるようにレゲエのLP をかけることに。これがメタルやパンクでは私が暴れだしてしまう可能性があるの、あくまで横揺れで作業を行います。最後の問題はアルコールを摂取しながら掃除をするのか？ するに決まってるだろう、馬鹿野郎が！ 実際のところ、ここまで時間をかけて計画を立てられたのも、アルコールがあったからだ。でなかったら、掃除しようなんて思わねーんだよ。このおかめ！ ひょっとこ野郎！

ああ、すっきりした。

私は掃除用具を持ちゴミ袋を下げて、ゴミの山に飛び込んだ。いってこます。まあ物事というのはどうしても上手くいかないようになっているようで、私も掃除を開始して一時間は、とんでもない勢いでムイムイ部屋に落ちているバターロール、チーズ鱈、ペペロシオン、裂けたオナホールなどをゴミ袋に積み進軍。行軍。絶好調に掃除を進めていたのだが、やはりそこは好事魔多し。強力な敵が現れた。そう、酒瓶である。

「酒瓶は燃える」ゴミでないと 再利用できない

基本的にゴミ出しルールブックによると、ゴミは「燃える」ものと「燃えないもの」に分別して集積所に持ち込まないとあかんらしく、それを怠ると処分場に持っていかれないという、とんでもないいけずをされる。それは困る。だがバターロールやオナホールは確実に燃えるし、「萌える」であろう。ただ酒瓶は燃えるだろうか？ 答えは微妙である。

よく「火酒」といわれるくらいなので、飲むと体が熱くなるのは間違いないが、本当にメラメラ体が燃え出すかというと、そんなことはない。体が燃えるような形容するのは、その酒の強さ、飲んだときのテンションを抽象的に表したにすぎない。しかも今説明しているのは酒瓶の話ではなく、中身の話である。

じゃあ、かえって酒瓶は燃えないか、といったら燃える。でないと再利用できないので、資源がごつつい食って日常生活に支障が出る。じゃあ燃えんじゃねえの？ しかし、これはかなりの高温をかけないと燃えないので処分場の火力では心もとないのである。

しかも今、この分別の問題が出てきてしまうと私の掃除に対するテンションがダダ下がりしてしまう。だって、面倒くせえじゃん。こっちはどうせ適当にゴミ袋に放り込んで、庭にぶん投げようと思っているんだよ。なぜかって？ もう半年も自治会費を滞納しているので、ごみ捨て場に捨てられねーんだよ。そこで「燃える」「燃えない」で混乱させられたらやってられないし、大体の男は燃えているんだよ。この、オカマのカウボーイ野郎が！

私は、一旦分別問題をやめ、掃除もよしてウイスキーをがぶ飲み、掃除中拾った貴重品の大麻樹脂をキセルにぶちこんでしこたま吸引した。青空が目にいたい。ボブマーリーが歌っている。「ラストマンバイブレーション」。明後日の朝まで起きない予定の俺だった。

(以下次号に続く)

「キヨちゃん、安らかに！」 ～ 亡くなった仲間へのレクイエム～



私が親しくしていた入寮者仲間のキヨちゃん(本名・横山清さん)が9月末に病死(脳出血)しました。享年55歳の若さでした。彼は栃木県出身で重度のアルコール依存症でした。聴覚障害と軽度の知的障害のハンディを抱えながらも、職歴ではいくつかの飲食店をはしごして料理人としての腕を磨きました。

調理の仕事は飲酒環境が身近にあり、重複障害によるコミュニケーション難から、彼は若い頃から「お酒が友達」となっていたようです。しかし、彼の飲酒は暴力的

になる傾向があり、周囲からますます孤立を深めていきました。精神科病院を経て約2年半前に潮騒ジョブにつながり、当初は頑張ってミーティングに参加しました。よくあるように、人間関係は苦手でも素面の彼は気持ち優しく、下津ナイトケア施設では犬の世話係を買って出て、朝夕の散歩が日課ようになっていました。

しかし、私達が考える以上に彼には重複障害がネックとなっていたようで、次第に仲間の輪から外れて下津施設にこもりがちの生活になりました。やがてデイケア活動にも参加しなくなり、どうやら隠れ飲酒をしていたようです。そのため病状が悪化して入院となりました。退院してもなかなか予後の病状が快方に向かわず、認知症も発症し、残念ながら2度目の入院時は既に終末期医療の状態でした。

でも、私は思います。どんな小さな死であっても人間に無駄な死はない、と。キヨちゃんは回復がとても難しいアディクトでしたが、困難であればあるほど私達には自分を映す鏡です。この逆説人生を自分の死を通して私達にメッセージしてくれました。どうかキヨちゃん、安らかに眠ってください。(スタッフ・アオ)

今年も本家の東京・新宿リカバリーパレードに参加



薬物・アルコール依存症者や心の病を抱える人など“生きづらさ”を抱えた人達が、「心の病からの回復」をアピールする第9回「リカバリーパレード『回復の祭典』」が9月23日、東京都新宿区で行われ、潮騒の仲間や様々な生きづらさを抱えている人達など約100人が参加しました。

パレードは潮騒エイサー隊メンバーが先頭でパレードを盛り上げ、新宿の繁華街を行き交う市民に向けて「依存症は回復できます」などとアピール、薬物・アルコール依存症や「心の病」に対する偏見を無くすよう訴

えました。参加した潮騒メンバー銀二郎は「いろいろな人が見てくれた。その人たちがどう思っているかわからないけどいい方向に向かってくれればいいと思った」と感想。

新宿リカパレは今回で9回目ですが、今年は全国9カ所にまで広がりました。実行の運営スタッフからは「参加人数は例年より少なかったけど、その分全国に広がっています。何よりも(リカパレを)続けられていることが大きな成果です」と述べました。その上で「追い風が吹き始めている感じがします。新しいSNSを使った広報が始まりつつある。新たな若者がリカバリーパレードに注目し、参加し始めています。明るい兆しかなと思う」との感想も聞かれました。

リカパレ出発会場の新宿中央公園では、潮騒の仲間達が出発準備をしている間、墓地の運営や社会奉仕活動に取り組むお坊さんたちで組織する「恩送り」から、ミネラルウォーター240本の差し入れがありました。また、今回のリカパレには、茨城県牛久市出身の摂食障害専門心理カウンセラーの堀越えつこさんも参加しパレードに厚みを加えていました。(サッキー)

受刑者からの手紙

依存症の回復は「底つき」して自分の無力を認めるところがスタートラインです。なのにこの国では裁判で「もう私は自力ではやめられません。どうか私を刑務所に入れてください」と本音を吐くは“反省なし”と見られてしまいます。ここに日本の依存症治療の遅れと難しさがあります。(今号は都合により「受刑者からの便り」は1ページです)

工場の副班長を任され責任 というものを深く考えている

日頃お世話に成っているのに節目のご挨拶もままならず大変申し訳無く思っている所です。センターの皆さんは、お元気で居られますか? センター長、シゲさん、皆さんの今が気になる毎日です。今年もビーチ(下津海岸)の掃除はしたのでしょうか? 夏男の自分としましては、早くこのイベントに参加したくて仕方ありません。潮騒では、年に色々な行事が有るので先々入寮出来ないにしても、イベントには参加させて頂き、皆さんと共に汗を流したい、と強く思っている所です。

入寮出来ないにしても、と云うのは千葉に居るお袋の所へ帰る頃には、お袋が80歳なので、一人で実家に置いておく訳にはいきませんので、入寮は無理だろうと考えています。自分は、簡単には薬物から手を引くのは難しいだろう、と云う事は十分に分かっています。まあまだその辺りの事を決めたりするのは早いので、その時が来た時はご相談しますので、宜しくお願い致します。

自分の近況ですが、最近工場の副班長を任され責任というものを、より深く考える様に成りました。色々な考えを持った人達が集まっている中、言葉遣い一つであれ、「俺ってこんなだったかな?」「少し人間的に進歩したのかな?」と思う部分も有ったりして、今迄の様なトゲトゲが取れたように思えたりして居ます。自分にもこんな部分が有ったんだな、それじゃ、これをもっと伸ばしていこう、そうすればもっと変われる、と自分探しをしている所です。

また何かを発見した時には手紙を書かせていただきます。
(北海道 Y・Y)

今の私は「潮騒の仲間」が居ると云う事を常に考えている

お手紙ありがとうございます御座いました。今年の夏はどうしたのでしょうか。連日の猛暑で、もう溶けてしまうのでは? と云う程位の暑さでしたが、栗原センター長はじめシゲさん、スタッフの皆さんお元気にお過ごしでしょうか? 私は元気にしています。

さてまず最初に残念なお知らせがあります。それは、最近あるトラブルにより、私は調査となってしまいました。せっかく職業訓練も頑張り、3塁に進類して6ヶ月間無事故を予定していたのですが、心無い言動に依りこのような結果になってしまいました。センター長やシゲさんに応援して貰って居たにも拘らず残念でなりません。本当に申し訳ありません。

ただ、工場の正担当さんが私の所に来てくれて、「これで仮釈が駄目に成った訳ではなく、残り3年程を頑張っていけば必ず早く出ることが出来るのだから、今回の事は、早い時期での事と考えてしっかりやれよ!」と言われました。私自身は少しショックを受けていますが、今後もとにかく自分を守るのは私自身だと考え、今回の件を糧として頑張っていきますので、引き続き応援の程、宜しくお願い致します。シゲさんが言われるように、今の私には“潮騒の仲間”が居ると云う事を常に考え、「感謝の心」と「継続は力なり」のシゲさんの言葉を胸に生活していきます。

人生には色々な出来事がありますが、私がこうして潮騒ジョブトレーニングセンターと出会い、今こうしてシゲさんと文通をしているのもきっと運命だったのだ、と思っています。そして、この縁を今後大切に育んでいき一日でも早くシゲさんにお会い出来る日を楽しみにしています。どうか御身体を大切に御自愛下さい。
(北海道 N・S)

しおさい、俳壇

10 月のお題 薩摩芋

選者 桐本石見

人生は 60 歳からでもやり直せる！ No.57 センター長 栗原 豊

密かに覚醒剤の受け取りを企図した酒屋が突然閉店に

開設まもない千葉ダルクでの施設生活に少しずつ馴染みながらも、そう簡単に回復プログラムに乗れるほど、私の病気は甘くはなかった。重度のアルコール&覚醒剤依存症だけに、私を試すように何度か魔が差しそうな場面があった。その頃、千葉ダルクには確定したミーティングなどのプログラムがなく、終日自由に使える休日の日曜には、刑務所で一緒だった仲間たちと筑波山への登山なども楽しんだ。幸か不幸か、その刑務所仲間たちはクスリとはつながりのない面々だった。私は、まだまだ自分がプログラムに専念できていない時期にあり、このままダルクでの生活が続いていけばいいのか、あるいは娑婆に戻ってクスリの売買で生きるヤクザの道を貫くべきなのか、ひどく迷っていた。

心は揺れながらも、私はある昔の仲間を通じて覚醒剤を入手し、自分では使わなくても売って小遣いにでもしようと考えた。しかしダルクでは手紙の授受や電話の使用などは禁じられている。考えられる手段は、近くに住む誰かに郵送される荷物の受け取りを依頼し、外に出た際にそこで受け取るという方法しかなかった。当時、施設の近くにはまだ喫煙者だった私がよくタバコなどを買いに行く酒屋があった。「そうだ、あの酒屋の主人と仲良くなって、仲間からの荷物を受け取ってもらえばいい」。私は酒屋に足繁く通い、店の主人と徐々に仲良くなっていった。「そろそろ話を切り出そう…」。

そんななか、不思議な出来事が起こる。クスリの受け取り先として目星をつけていた酒屋が突然、閉店してしまったのだ。その直後に、千葉ダルクへ鹿島ダルクの若い責任者が現れる。当時、鹿島ダルクではスリッパをしたり、一方的に施設を離れたりして 3 人ほどのスタッフがなくなっていた。私は責任者の Y 氏との面接を経て鹿島ダルクへの移動を指示された。面食らう余裕もないままに、私はスタッフとしての研修を開始することになった。ダルクにつながって、まだ 1 か月ほどしかたっていないのに、私の運命は思わぬ方向に転じていった。(次号に続く)

佳作

里山に家族と食べる薩摩芋	一二三	薩摩芋葉っぱの下でほっこりと	なん
香りにもほっこり笑顔薩摩芋	久美	乙女達三時のおやつ薩摩芋	あきら
薩摩芋焼いてほおばり幼き日	マコ	薩摩芋竈の前で客を待つ	ヒロ
焼き蕎麦や早くしないと去る車	のん	薩摩芋ほおばる子等の笑い声	こば
しつとりのスウィートポテトに一目惚れ	れいこ	茹でる焼く天ぷら煮つけ薩摩芋	ゆたか

特選句

茨城の
美味しき諸の
紅はるか

ピノコ

薩摩芋はメキシコ原産で紀元前八百年頃から栽培され、日本へは十七世紀初めに中国、琉球、鹿児島を経て広まった。種類は外皮が黄と紅色があり、今では改良されて何十種もある。関東で名高いのは紅あずま、紅はるか。昔は農林六四号などと言ったが、今は可愛い名を付けて販売の宣伝をする。

特選句

子供等と
分け合ひ食べし
薩摩芋

アキラ

日本の薩摩芋は八代將軍吉宗の頃享保大飢饉があり、その時に救荒作物として青木昆陽等によつて広められた。乾燥地、荒地また早や台風などでも育った。戦後の食料難を救ったのも薩摩芋で、焼き諸を兄弟などで食べた昔を偲ぶ句です。

特選句

啄木も
賢治も食べし
薩摩芋

あべ

宮沢賢治は一八九六年生で三十七歳で没。その間、『銀河鉄道』や『雨ニモマケズ』など多くの詩を残した。石川啄木は一八八六年生で二十六歳で没。その間、『一握の砂』など多くの歌を残したが、共に若くして亡くなった。東北の貧しさと思う詩歌も多く、胸を打つ。薩摩芋を食べながら二人も食べたであろう昔を偲ぶ句です。

秀逸句

今月の秀逸句

軽トラを
見れば焼き諸思ふかな

ユウコ

焼き諸屋の屋台は一九五一年頃、東京向島の三野輪万蔵が発案し、ブームになったと言う。今では軽トラで各地を回るが、売り声と共に都会や団地の午後が懐かしい句。薩摩芋は焼くのが一番美味い。

薩摩芋

半分を残し嫁昼寝

あべ

三時のおやつかも、大きな薩摩芋だったので、半分を残して昼寝したのだ。人は満腹になると眠くなる。私の子供の頃は秋には栗や薩摩芋を焼きながら、風呂焚きをしたのが懐かしい。

焼き諸を

手にす熱きを我慢して

みく

俳句では焼き諸は冬の季語で、寒い中に食べる諸は格別に旨い。また熱いのも冬の御馳走と言うべきかも。今では焼き諸屋さんも見掛けないが、新聞紙や袋に伝わる温みも家までの手を暖める実感の句で、売り声も聞きたく思う。

お諸掘り
あるよあるよと園児達

しま

今でも学校によつては田畑を持ち、米や薩摩芋を栽培する。また園児達は近くの農家に頼んで芋堀などする。勉学も大事だが、こうした野外の活動も子の心を育てる。賑やかな子の声を彷彿する句です。

ごろごろと

機械掘り出す薩摩芋

ゆたか

日本では一九五十年頃から農業機械の輸入や改良が始まり、今では田植・稲刈り・脱穀まで出来るし、種蒔・芋堀も機械化された。稲作は弥生時代と言われるが、その間の耕し手植を思うと、気が遠くなる。また戦争の機器より開発が遅いのが悲しい。それらを思う句です。

秋風や

小牧長久手古戦場

ゆたか

小牧長久手の戦いは羽柴秀吉と徳川家康の戦で、一五八四年三月から十一月まであり、名目は秀吉軍の勝利。その後小田原征伐など経て豊臣政権が確立する。秋風に靡(なび)く芒原に往時を偲ぶ句です。

どっこい

私も生きてます～我が回復記～ 「アル中のシゲ」の巻

第4回

酒を飲むと狂人化して人に暴力を振るうタチの悪い酒乱に

私は子どもの頃からわがままで、おもちゃ屋さんの前に行くと駄々をこねて泣き出し、買ってもらうまで泣き止まない、とんでもないガキでした。それは大人になっても変わらず、欲しいものは何でも手に入れていました。貪欲な私ですから人をだますのも得意で、その際の“武器”となるのがお酒です。自分を尊大にさせるお酒の力というのは、私にとって命そのものでした。こんな素晴らしい液体は他にはなく、毎日がハッピーでした。さぞかし他界した父、妻、叔父が草葉の陰で泣いていたと思います。しかし、そんな偽物の幸せな毎日が永遠に続くわけはありません。これからが私にとって最悪の経験でした。

身内の死によって得た保険金で私の豪遊生活は、ますますエスカレートして行きました。酒におぼれ、次は何を買いおうか、どこのお店に行こうか、などと狂った頭で考えていました。いつものように朝からビールを飲み干し、焼酎に切り替えて独り酒の始まりです。好きな音楽をボリュームアップして聞きながら飲むお酒は格別でした。夕方になれば仲間が家にやって来るので、気持ちがハイになります。酒飲み仲間と楽しい酒盛り、まるで天国にいるような感じでした。

しかし、楽しい酒を飲んでいるときに仲間の一人が他の仲間に暴言を吐いた瞬間、私はキレてしまいました。暴言仲間の頭をビール瓶で殴りつけ、それでは収まらず、殴る蹴るの暴行を加えたのです。その仲間は気絶してしまい、私は水をかけて無理矢理起こしました。もはや私は人に対してクレームをつけては暴力を振るう、狂人化した酒乱になっていました。それも男女問わずに、です。私は自分の思い通りにならないと、お酒の力を借りて暴れるタチの悪い酒乱でした。

結局、人を支配しているつもりが、私はアルコールという液体に支配されていたのです。まるでロボットやマリオネット（あやつり人形）のように…。それでも私はお酒をやめることなどみじんもなく、飲み続けていました。もはや私はお酒がないと生きていけません。この世にお酒があることに生きがいを感じつつ、毎日がバラ色の人生（飲酒によりそう錯覚していただけでしたが…）を送っていました。しかし、バラ色の人生というのはいつまでも続くことはありません。これから先は地獄への道行きです。世間では“酒は百薬の長”と言いますが、私にとっては百害あって一利なし、不幸をもたらす悪魔の使いでした。（次号に続く）

10月のバースデー

あお



健康第一
(少し休んでください)

かっちゃん



くそじじい、永遠に！

まひと



ただいま旅行中です。♡

タカク



ありがとう

かた



今日一日
感謝できますように！

まさ



潮騒の古株です。

きら



ありがとう

なおと



潮騒の仲間です

10月の行事

- 10月8日 潮騒リカバリーパレード
 10月11日 潮騒俳句会
 10月13日 潮騒人間塾
 (講師：田代まさし氏)
 10月14・20日 秋元病院メッセージ
 10月20日 潮騒エイサー慰問活動
 (水戸市内)
 10月27・28日 第28回鹿嶋まつり
 10月28日 潮騒家族会

11月の行事予定

- 11月3・4日 て〜ら祭
 (鹿嶋市まちづくり市民センター)
 11月8日 潮騒俳句会
 11月11・17日 秋元病院メッセージ
 11月25日 潮騒家族会

献金・献品を頂いた方 (10月15日現在)

・メイズ様 ・岡部様
 ・中坂 松美様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いいたします。

編集後記という名の独り言

以前は仕事柄も手伝い、月に最低でも4～5冊の本や雑誌を読んでいたが、今では高齢と糖尿病の影響からか視力がだいぶ衰えてしまったので、活字を追うのもひと苦労。日々の新聞を読むのさえ億劫になっている。時代の流れで仕方がないが、書店に出向いても僕の仕事の範疇である人文・社会関係の本が片隅に追いやられたので、本屋通いの習慣もなくなった。どうしても必要な本はアマゾンでネット注文すれば、簡単に手に入る。便利な時代になったものだ。詩人の田村隆一は「銭湯廃れば人情廃る」と嘆いたが、「書店廃れば知識廃る」とはならないようだ。そんな中、ここ数日は依存症についてのお勉強をする機会を得た。①「だいじょうぶ! 依存症」(高部知子著)と②「薬物依存症」(松本俊彦著)、それに薬物依存と性犯罪を特集した③月刊誌「創(つく)る」11月号を連続して読み、改めてこの国の依存症の現状について認識を深めることができた。①は専門病院の臨床を踏まえた依存症についての格好の入門書、②はこの国の依存症治療研究をリードする第一人者による最先端の体系的学術書、そして③はジャーリズムではこれ以上望めない依存症の本質を追求する秀逸企画で、大いに知的な刺激を受けることができた。そこで考えたのが、我が身の立ち位置について。今後、依存症については医療、福祉が先行しながらも司法、教育、文化、習俗…と各分野からのアプローチが進んでいこう。日本ダルク代表の近藤恒夫さんは一貫して、当事者と世間との「通訳兼橋渡し役」が必要だ、と訴えてきたが、そのメッセンジャーの役を担おうと僕は微力ながら関わってきた。その場を与えてくれた栗原センター長と潮騒には感謝しかない。その僕の関心はただひとつ。自己矛盾は承知の上で、依存症の回復は理屈を超えたスピリチュアルな魂の彼方にあることの意味を自分の言葉で紡ぎたい、ということ。おかしな連中が集まるおかしな空間だから、僕のおかしな試みもきつと許されると思う。(市)

潮騒通信 **どっこい生きてます!** 2018年10月

Contents

- P② 潮騒リカパレで困難を克服する確信深める
 P③ 初の安全運転講習会
 P④ 潮騒リカパレ in 鹿嶋
 P⑦ 「潮騒人間塾」渋谷ダルク代表 トムさん
 P⑧ がーちゃんの極私的懺悔録 その8
 ～アルコールによる幻覚の中でおかしなゴミ問題に悩む
 P⑩ ・「キヨちゃん、安らかに!」～亡くなった仲間へのレクイエム～
 ・今年も本家の東京・新宿リカバリーパレードに参加
 P⑪ 受刑者からの手紙
 P⑫ しおさい俳壇 10月のお題「薩摩芋」
 P⑭ どっこい私も生きてます「アル中のシゲ回復記」/ 10月のパースディ
 P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次

■ 編集・発行：

特定非営利活動法人
 潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
 〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒アディクションビレッジ会館
 (潮騒アディクション・ケアセンター)
 〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール **k.s-darc@orange.plala.or.jp**

ホームページ **http://shiosaidarc.com/**





潮騒 リカバリー in 鹿嶋 パレード

